

## 平成19年度(第16回)ブループラネット賞 受賞者を迎えて表彰式典並びに祝賀パーティを開催

平成19年度(第16回)ブループラネット賞の表彰式典が、平成19年10月17日、東京會館において開催されました。本年度の受賞者は、環境保護に「公共信託財産」の考え方を取り入れた世界最初の市民環境法の起草に携わり、環境保全に関わる法律を理論的に構築し、国際的にも環境法の体系確立に先駆的に貢献した米国のジョセフ・L・サックス教授と、「ソフト・エネルギー・パス」の概念の提唱や「ハイパーカー」の発明により、エネルギー利用の効率化を追及し、地球環境保護に向けた世界のエネルギー戦略牽引に大きく貢献した米国のエイモリ・B・ロビンス博士です。

表彰式典は、秋篠宮同妃両殿下のご臨席を賜り、各国大使をはじめ、官界、政界、学界、経済界を代表する数多くのご来賓にお集まりいただきました。

自然の叡智の調べに耳をかたむけ、私たちに生命の大切さを語りかけてくれる青い惑星に思いをはせるための一助となれば、と願いを込めたイメージ映像で開幕しました。

秋篠宮殿下からお言葉を頂き、続いて北畑隆生経済産業事務次官から福田総理大臣のご祝辞が披露された後、両受賞者のお国を代表して、J・トーマス・シーファー駐日アメリカ合衆国大使からご祝辞が述べられ、両受賞者の地球環境問題に対する熱意と業績が讃えられました。

式典に引き続き行われた祝賀パーティーは、ご来賓の方々の祝福で和やかな雰囲気になりました。サックス教授とロビンス博士の周りには、たくさんの方々が集い、優れた業績を讃える言葉が述べられました。

ブループラネット賞表彰式典にてお言葉を述べられる秋篠宮殿下



ジョセフ・L・サックス教授

エイモリ・B・ロビンス博士

# これからの地球環境保全には、国際的な規範と

## 平成 19 年度 (第 16 回) ブループラネット賞

### 受賞の辞 — 抜粋 —

#### ジョセフ・L・サックス教授



このたび、旭硝子財団の「ブループラネット賞」を、環境保全で偉大な業績を収められたエイモリ・ロビンス博士と共に受賞することはこの上ない名誉です。

ブループラネット賞は、受賞の栄に浴することのできるものすべてにとって大変な榮譽です。しかしもっと重要なことは、この賞がまさしく、人々の健康や幸福のために環境の質を向上させ、私たちと将来の世代が共に依存せねばならない自然生態系の機能を維持・修復しようとする活動の重要性を認識していることにあります。

環境保護に対して世界中が精力的に取り組んでいることは、「ブループラネット賞」が 1992 年に創設されて以来、世界中のあらゆる国から受賞者・組織が輩出されていることにもよく表われています。今から 15 年以上も前にこの賞の創設のきっかけとなった当時の環境問題の心配事—地球温暖化問題、エネルギー問題、生態系の破壊、種の絶滅—は、今や、国内的にも国際的にも緊急な対応を迫られている問題となっているのが現実で、正に、地球環境問題の研究と解決を目指してこの賞を創設された方々の先見性を示していると言えます。

これまで、ブループラネット賞が科学や技術の分野で貢献のあった個人並びに科学や技術のさらなる発展につながる業績を上げた組織に授与されてきたのは、大変ふさわしいことだと思います。私は、この度、この賞が法律の仕事をしているものに授与されることが新たな先例になることを強く意識しますとともに、科学の分野で挙げられたそれらの極めて重要な業績は、法の支配が機能し尊重される世界でのみ充分に成果を収めることができるということを、この賞が今年評価したことを特に心に留めています。

最後に、両殿下並びにご来賓の皆様にご臨席賜りましたことを心より感謝申し上げます。またご多忙な中を馳せ参じて下さいました大勢の友人に御礼を申し上げます。私達が初めて日本を訪れたのは 1970 年で、それ以来何度か訪問し、楽しい思い出が数多くあります。この度の受賞で、再び日本に帰ることができ、手厚い歓迎とおもてなしを頂きました。この幸福な機会を分かちあうために一緒に参りました妻のエリーと三人の娘と共に旭硝子財団に心より御礼を申し上げます。

#### エイモリ・B・ロビンス博士



この榮譽ある「ブループラネット賞」は、ロッキー・マウンテン研究所の同僚や世界中の研究者との永年に亘る共同研究に対して授与されたと思っています。私は、この賞が日本で生まれたことに特別の意味があると考えます。日本は無駄の排除、人と自然を調和させる美しく簡素なデザイン、速やかな合意形成と適用への社会的能力にかけて世界的なリーダーで、無害、安全で、低価格なエネルギーへ永久的に転換する世界の範となれます。そのため日本人には次の四つの変革に挑戦することが求められます。

1. 日本は 1970 年代のオイルショック後、エネルギー効率を画期的に向上させましたが、今ではその面影は薄れています。大半の日本人は、温暖化防止が利益や質の高い生活をもたらすのではなく、コスト負担、犠牲を強いるだけと考えています。もし日本人が可能性に気づき、実現に向けて働きかけさえすれば、最新の技術はエネルギー効率を三倍以上高め、安全性を増し、私達のブループラネットを守ることが出来ます。

2. 日本は燃料資源には乏しいものの、再生可能エネルギーでは主要先進国中で最も豊んでいます。もし日本の政策決定者がこの事実を認識し承認するならば、日本は、どの国よりも早く再生可能エネルギーへの転換を実現できます。

3. 大工業経済に巨大な発電所が必要だという従来の考えは時代遅れです。もし、旧来の集中型プラントが優れているという考えを捨てれば、小型化・情報化の革新により低コストで信頼性も高くなった分散型発電機を何百万と設置することが可能です。

4. めまぐるしく変遷するエネルギー技術と市場により、旧来の方法は国益に適わなくなっています。日本のエネルギー政策に必要なのは、多様性と機敏性、開放性です。もしエネルギーが種類、技術、生産場所、施設の規模、所有者の如何を問わず、その貯蔵や生産に対して正当な価格と公平な競争下に置かれるならば、日本の優れた技術と商才は素晴らしく花開くことになります。

以上 4 つの「もし」に日本と世界のエネルギーの未来がかかっています。いずれも困難ですが、挑戦すれば巨大な機会が生まれます。以上述べた可能性を現実のものとし、その成果を近隣諸国と分かち合うならば、日本は歴史的に追求してきた究極の目標を達成することができ、地球上のすべての生物は皆、幸福と感謝で満たされることでしょう。





## 贈賞理由紹介 吉川弘之選考委員長

### ジョセフ・L・サックス教授

サックス教授は、1960年代半ばに関わった殺虫剤散布差し止め請求訴訟の不成功から環境法分野に関心を持つようになりました。

1970年に、すべての人に公害やその他環境破壊行為から法的保護を受ける権利を認めるという画期的な、「サックス法」として知られる、世界で初めての環境法ミシガン州環境保護法を起草しました。1986年にカリフォルニア大学バークレー校に移り、近年は、文化的遺産の保護も公共信託概念の対象とすべきと説いています。

サックス教授は今日に至るまで、世界を代表する指導的な環境法学者として、法律関係でイノベーションを創出し、多くの法学者に影響を与え、広く活躍、貢献しておられます。



### エイモリ・B・ロビンス博士

ロビンス博士はオックスフォード大学で学ぶ中、自然と環境への関心を深め、気候・エネルギー問題に取り組み始め、1976年に、エネルギー利用の効率化ならびに太陽、風力等「ソフトエネルギー技術」の利用を主とする新たな体系「ソフト・エネルギー・パス」の概念を提唱しました。

1982年にはロッキー・マウンテン研究所を設立し、エネルギー・資源の効率的利用の理論の実証にも力を入れ、エネルギー利用効率の高い建物を実現し、省エネ自動車ハイパーカーを発明しています。

博士は、非効率的なエネルギーの利用が多く、経済、安全保障、環境の問題を引き起こしているとして、高エネルギー効率の達成、エネルギー供給の持続可能化による問題解決の道筋を示し世界のエネルギー戦略構築に影響を与えました。

## プロフィール映像より抜粋

### ジョセフ・L・サックス教授



ハーバード大学に入学し、文学を専攻

1966年  
ミシガン大学教授として「環境学」を教える



クリントン政権の内務長官顧問時代のトルコ視察



1970年  
世界初の環境法である「サックス法」が誕生



国際シンポジウムで公共信託理論の考えが「東京宣言」に盛り込まれた

家族に囲まれて



### エイモリ・B・ロビンス博士



デイビッド・ブラウワー氏の要請を受け「地球の友」英国代表に就任

1977年  
カーター大統領にエネルギー政策へのアドバイスを求められる



RMI スタッフに囲まれて



1982年「ロッキー・マウンテン研究所」を設立

超軽量で空気抵抗の少ないハイパーカーを発明



## 多数の聴衆を集めて受賞者記念講演会を開催

10月18日には、東京・国際連合大学ウ・タント国際会議場において受賞者の記念講演会が開催されました。300名近い方々が参加され、ほぼ満席となる盛況でした。第1部ではサックス教授の講演と、名古屋大学名誉教授の森島昭夫教授のコーディネートによる質疑応答、第2部ではロビンス博士の講演と国際連合広報センター所長幸田シャーミ

ン氏のコーディネートによる質疑応答が行われました。コーディネーターの巧みな対話と進行によって、会場の参加者からも多くの質問が集まり、中身の濃い活発な質疑応答が展開されました。受賞者の方々の業績に対する理解が深まると共に、私たちの行動の指針を学ぶ貴重な機会となり、充実した4時間弱を過ごしました。



### ——環境問題に携わる世界の有識者の認識—— 第16回「地球環境問題と人類の存続に関するアンケート」調査結果

当財団では、環境問題に携わる世界の有識者を対象に、環境問題に対する様々な取り組みに関して意識調査を1992年以来継続して行っています。地球環境を保全するにはグローバルな対策が不可欠であり、世界の人々が環境問題解決に向け共通の認識を深め、協調関係をはぐむことが重要と考えているからです。本年度4月～5月に実施した調査の中から「環境危機時計」について報告します。調査結果はホームページ (<http://www.af-info.or.jp/>) にも掲載しておりますので、ぜひご参照ください。なお、調査票や報告書作成にあたっては、地球環境戦略研究機関特別研究顧問で当財団理事の森島昭夫先生に監修していただきました。(アンケート回収数 715 (国内 322、海外 393)、回収率 18.3%)

#### 人類存続の危機に対する認識「環境危機時計」

「環境危機時計」とは、回答者が地球環境の悪化に伴う人類存続の危機の程度を時計の針で表示したものです。2007年は、昨年に比べて14分進み、9時31分となり、これまでで最も針が進んだ危機意識の高い結果となりました。日本の危機時刻は、昨年に比べて19分進み、9時34分、海外合計は、針が9分進み、9時28分となりました。

